No. 1

２０１８年度　教育学部　自己推薦入試 問題用紙

受験番号					
氏名					

「 小論文 」
複合文化学科

日高敏隆『動物と人間の世界認識』に収録された次の文章を読み、問いに答えなさい。

概念によって構築される世界

人間にも知覚的な枠はいろいろある。たとえば、超音波は人間の耳には聞こえない。だから人間は超音波がどのようなものかを感じることはできない。

しかし、超音波というものがあることは、いろいろな方法で証明することができる。機械によってその振動数を落とせば、それを聞くこともできる。けれどそのときに聞けるのは、可聴音の範囲に振動数を落とした、つまり音に変えた超音波であって、超音波そのものではない。

紫外線も同じことである。紫外線は物理学的にいえば、地球上に存在する、いわゆる電磁波のある部分である。人間の目はその電磁波の波長が約七〇〇ナノメーターから四〇〇ナノメーターのあたりまでの部分を目で光として感じることができる。しかし、それをはずれた、七〇〇よりもっと長い波長の電磁波、つまり赤外線や、あるいは四〇〇より短い波長の電磁波、つまり紫外線は、知覚的には感知できない。

けれど、機械を使って、それを音に変えるとか、いろいろなことをしてみると、人間には直接には感じられないが、そこにある波長の電磁波が存在していることは理解できる。そして、紫外線という言葉で呼ばれている電磁波があって、それが人間の体に、たとえば日焼けを起こさせるという作用をもっているということもわかる。あるいは赤外線だと、目には見えないが、肌で熱いと感じる。したがって、たとえばそれを使ってヒーターをつくってみたりできる。

しかし、人間はそれを光とは感じていないから、赤外線がいまそこにあるといっても明るいわけではなく、それはただの暗黒である。けれど赤外線に反応する機械を使ってそれを電気や光や数値に変換してみれば、赤外線というものがあるということはわかる。それによってわれわれは感じることはできないが、この世界にそのようなものがあるということがわかった上で、世界を構築していくことができる。

たとえば、紫外線が当たると皮膚が日焼けを起こすことも、夏の紫外線が非常に強いということも、概念ないし知識としてはわかっている。日焼けはしたくないとなると、紫外線を吸収する物質はないかと探してみて、そのような物質で日焼け止めクリームをつくる。それによって、人間は紫外線による日焼けを避けることができる。これは人間がまさに概念によって構築した世界の中で、どう生きるかを考えているからである。

電磁波に関することだけでも、物理学にはこのようなことが非常に多くあって、それが工学とむすびついていろいろな形で人間の役にたっている。ラジオ然り、テレビ然り、X線検査機等々然りである。いまわれわれは、そのようなものを非常にたくさん使っている。コンピューターは電子の働きを物理学者が調べてわかったことによってできたものである。電子というものをわれわれはもちろん見ることはできない。電子がどう動いているかということも見ることができない。しかし、機械を介することによって、われわれにはそれがわかり、それによって世界を構築することができる。

あるいは放射線というものがある。いうまでもないが、放射線は、物質の原子が崩壊するときに原子核の中から飛び出してくる、非常に小さい粒子である。もちろん人間はまったく見ることはできない。あるいは、宇宙線にしてもそうである。宇宙からそういうものが降り注いでいるということは、まったく目に見えないし、体にあたっても痛いわけでもない。けれど、そういうものの存在を証明するような機械をつくることができる。たとえば、放射線の場合だと、写真のフィルム。フィルムの中には銀の粒子が入っているのであるが、その銀の粒子に放射線があたったときに、銀の粒子が破壊される。現像して調べてみるとそれがわかる。

そこでわれわれは目で直接には見えなかったけれど、その放射線が起こした結果を目で見えるようにしたことによって、放射線というものがそこに存在していたということを知ることができる。そのことによってわれわれは宇宙線、放射線というものがこの地球上にあるのだということがわかった。

最近、ノーベル賞受賞で有名になったニュートリノにしても、あるのではないかということは理論的にはわかっていた。本当にそれがあるのかどうかを調べるために、巨大なスーパーカミオカンデという装置を作り、そこで水の粒子にニュートリノがあたったとき起こったことを機械でキャッチしてみると、たしかにニュートリノと考えられるものであったことがわかった。こうしてわれわれは、この地球上には人間にはまったく感知できないニュートリノという非常に微小な粒子が存在しているということを知った。

それによってわれわれはひとつの世界を構築する。このような世界は人間しか構築していない。ネコやイヌはまったくそのようなことは知らない。ニュートリノなどというものが存在することも知らず、感じることもできず、それを何かに変えて証明すること

２０１８年度　教育学部　自己推薦入試 問題用紙

受験番号					
氏名					

「 小論文 」
複合文化学科

もできない。したがって彼らの世界にはニュートリノというものは存在していない。

しかし、人間は地球上にはそのようなものがあるということを知っている。そして、そういうものとしてこの地球を頭の中で考えている。けれど、現実の感覚としてわかっているということではまったくないので、それはある意味でいうと現実ではない。現実ではないと感じられるあるものを、なんとか現実のものとして見えるように変えていくのである。そしてその知識と概念の上に立って世界を構築し、宇宙の進化まで論じようとしている。

見えないものを見る

人間が構築している世界は、その非常に多くがそのようなもので成り立っている。われわれが現在使っているきわめて多くのもの、たとえば携帯電話にしても、コンピューターにしても、インターネットにしても、すべてその内容が目で見えるものではない。結果をコンピューター画面に表示するかプリントアウトするかすれば、われわれにも見ることができる。メールが空を飛んでいるのを見ることはできないが、それをしかるべき機械で受けて、たとえば、携帯電話の画面に出せば、それが読める。ただし、それが自分の理解しうる言語であれば、である。

このようにして人間は、ある意味で不思議な世界をつくりあげていることになる。こういった世界は、少し前の人間にはまったく考えられなかった。

今から一〇〇年ちょっと前、つまり一九世紀の終わりから二〇世紀の初めにかけて、人間は知覚的に感知できない電磁波のある部分を使って無線通信をする方法を考え出し、それがラジオの発明につながった。

電磁波のその部分はかつてはラジオ波と呼ばれていたが、もちろん人間は直接にそれを感じることはできない。しかし、しかるべき装置が考え出されると、その装置でそれを受けて音に変え、ラジオ波の存在を確認することができる。そして逆に、そのような電磁波を発生させることもできるようになった。そうなればそれで発生させたラジオ波を飛ばし、それを受信機で受けて音に変えるラジオという新しい機械が誕生した。

しかし、ラジオの発明以前の人びとはそんな電磁波があることも知らなかった。したがって、その人びとの世界にはラジオ波というものは存在していなかった。そしてラジオ波があるという世界も彼らは構築することができなかった。しかしわれわれはそれを

知っている。

さらにラジオではなく、テレビというものもできた。カラーテレビもつくられた。われわれは、きわめて日常的にそれを見ている。しかし、どのような電波がどのようにして送られてきているのかはまったくわからない。空中をどのように飛んでくるのかもわからない。それはテレビの受像機で受ければ映像としてわかる。しかし、われわれはそれによって世界を見ている。今現在、世界のどこで、何がおこっているかをちゃんと見ることができる。昔の人はそれを見ることができなかった。人間の世界はどんどん変わってきているのである。

興味ぶかいと思うのは、このようにしてできたラジオやテレビによって得られた内容から何を考え、いかなる世界認識をするかはイリュージョンであるのに対し、ラジオ波とか電子とかいうものはイリュージョンではないということである。

もしラジオ波や電子が論理的につくりあげられたイリュージョンであったとしたら、ラジオやテレビという機械をつくることはできなかったであろう。

しかしニュートリノの例で述べたように、ラジオ波とか電子のようなものがきっと存在しているはずだと予想することは、イリュージョンの問題である。

その上に立って順次証明されていったラジオ波や電子を使ってラジオやテレビができたとき、ラジオ波や電子はイリュージョンではなくて現実のものであったことがわかる。それは現実だと信じられるイリュージョンでもなくて、まさに現実の存在なのだ。

しかし、人間がラジオ波や電子につながりうるイリュージョンを持たなかったほんのわずかな昔の時代には、そのようなものは存在しなかった。いうなれば、イリュージョンによって現実が姿を見せてくれたのである。

そしてそのラジオやテレビによって報道される内容は、もはや現実かどうかはわからない。それはその報道に関わる人びとのイリュージョンによってつくられているからである。

その内容を現実と思うかどうかもイリュージョンの問題である。たとえば今日のイラクの状況の報道を見て、アメリカは正しいというイリュージョンをつくりあげる人もいるだろうし、アメリカはまちがっているというイリュージョンを抱く人もいるだろう。

ラジオ波や電子の存在、そしてラジオやテレビという機械は結局のところイリュージョンによって生まれた現実かもしれないが、それがまた次のイリュージョンをつくり出すことになるのである。人間の構築する世界は、このようにしてどんどん変わっていく。

２０１８年度　教育学部　自己推薦入試 問題用紙

受験番号					
氏名					

「 小論文 」
複合文化学科

文化の変遷

そこで、いろいろなことが問題になる。たとえば、ラジオは必要だが、テレビは要らない、という人が少し前まではたくさんいた。それは自分が生まれたときにはラジオはあったが、テレビはなかった人たちである。彼らの世界の中にはラジオはあったが、テレビはなかった。だからあんなものは余計だ、なくてもよいという。しかし、もっと後で生まれた世代は、生まれたときからテレビがあった。あたりまえのものとして存在していた。したがって、彼らの世界はテレビによって構築されている。テレビがなかったら困る、世界が構築できない、というまでになっている。それを世代のギャップとか、世代による感覚の違いとかいうのであろう。

さらにそれは、同じ時代、同じ世代においても、文化によって変わる。たとえば、いくつかの文化では、何か、恐ろしい神がいて、その神によってこの世界ができており、人間はその世界の中で生きている。そういう世界を考えていた。もちろん現実の世界に、そのような恐ろしい神がいるはずはなくて、人びとがそのように信じていたのである。

神々の間にははげしい対立があると考えられ、複雑な宗教体系も構築されていたらしい。

これは現実ではなくて、つくりあげられた世界である。つまり、これはある種のイリュージョンである。しかしこのイリュージョンによって、これらの文化の人びとは、自分たちはどう生きるべきか、どのようにすれば神が喜び、自分たちがなんとか幸せに食っていけるか、という具合にものを考えて生きていこうとしていた。世界がどんなふうにできていて、誰のおかげで世界があるのかというようなことをイリュージョンによって構築しなければ、その時代の人びとはきっと生きていけなかったであろう。そのようなことは他の文化・文明についてもみな言えることである。

人間には古い古い時代から現代にいたるまでさまざまな文化が存在していて、それぞれがもっていたそのイリュージョンに基づいて、その人びとが構築していた世界はみな違っている。そして、文化が滅びたとき、その世界も崩壊する。崩壊するというよりも、なくなってしまう。同じ場所に、また別の人びとがきて、あるいは同じ人びとかもしれないが、文化が変わって、違うイリュージョンをもつようになったかもしれない。そうすると、そこで構築される世界はまた違ったものになるであろう。

イリュージョンも変化する

それほど古い時代のことでもない。ほんの数百年前まで人間はこの世界はまったく平らなものだと思っていた。それは当時の人びとが日々経験していた事象から、世界とはそのようなものだと考え、それでとくに矛盾を感じることがなかったからであろう。そこで、人びとはそのように考えて世界を構築し、その世界の中でどう生きていくか、旅をするにはどうしたらよいか、地図を作るにはどうしたらよいかということを考えていた。そして、それに従って生きていた。

しかし、よく知られているとおり、その後、どうも地球は平らではなくて、丸いのではないかというようなイリュージョンがでてきた。そして、それを証明するようなことがいろいろわかってきて、結果的に地球は丸いのであるという新しいイリュージョンに変わった。

そうすると、人びとは丸い地球という世界を構築して、丸い地球の中でどう生きていくかということを考えた。もし地球が丸いのなら、西から行っても東から行っても同じ場所に到達できるはずで、実際に探検家はそれをやった。そして、アメリカ大陸を「発見」したり、いろいろな島々を発見した。発見してみると、そこにはヨーロッパ人たちとはちがったイリュージョンをもち、そのイリュージョンによって世界を構築している人びとがいた。

ヨーロッパ人たちはしばしばそういうイリュージョンを叩き潰そうとし、「改宗」させようとしたりした。しかしそれは、結果的には奇妙な形となって残っている。

かつてインカ帝国の土地であったチンチェーロでは、正式のカトリックの神父が夜になると土地伝統の呪術師になり、十字架を振りながら「我、只今よりイエス・キリストの御名において呪いを行う」とおごそかにのたまうという話を読んだことがある（三浦信行『呪術の帝国』二見書房、一九六二年）。

いずれにせよ、異なるイリュージョンを持つ二つ以上の文化が出合った場合、多くは複雑なことが起こり、イリュージョンの闘いになったり、新しいイリュージョンが生まれたりした。

人間は概念によってイリュージョンを持ち、そのイリュージョンによって世界を構築する。他の動物はおのおのがその知覚的な枠に基づくイリュージョンによって環世界をもっている。知覚的なものはおいそれとは変わらないから、代々まったく同じ環世界を

２０１８年度　教育学部　自己推薦入試 問題用紙

受験番号					
氏名					

「 小論文 」
複合文化学科

もっている。もちろん状況によって変わることはあるが、その状況が同じであれば、いつも同じであるわけで、たとえば、モンシロチョウの場合のように、子孫を残すためにメスを探しているオスであれば、その環世界の中に花は存在していない。しかし、空腹になれば、忽然として花が出現する。しかし、彼らの世界の中に、ラジオ波とかコンピューターとか、電子などというものはまず絶対に出現することはない。人間の場合には、いろいろと探っていくことによって、人間の知覚ではわからないが、人間の知覚の範囲内にものを持ち込んでくるような機械をつくりだしていくことによっていろいろなことを理解し、次つぎにイリュージョンを生み出してきた。その結果として、人間が構築する概念的世界も変わってきた。

7

問１
全文を要約しなさい。

問２
筆者が言うように、現代の社会ではさまざまなイリュージョンがぶつかりあい、変化しています。このような時代に、人々はどう生きるべきか、あなたの考えを述べなさい。

No. 1

２０１８年度　教育学部　自己推薦入試 解答用紙

受験番号					
氏名					

「 小論文 」
複合文化学科

採　点　欄

何番から解答してもかまいませんが、解答の前に、問いの番号を「問１」、「問２」のように記しなさい。

裏面使用可

ここから記入すること↓

ここから下には記入しないこと